

中国を見て・感じて・探る…大連事務所発のレポート

大連のネットニュース「天健ネット日本語版」より

国際ワイン産業園を建設

6日、大連保税区管理委員会、大連海昌グループとフランス拉蒙酒業グループはシャングリラホテルで総投資30億元の国際ワイン産業園プロジェクトの調印式を開催しました。国際ワイン産業園はワイン荘園、ワイン小鎮、ボルドーワイン博物館、フランスワイン学校、中仏ワイン文化交流センターなどを設立する。フランスからブドウを導入し植え、フランスの農業専門家から現場での栽培指導を受け、そしてフランスの有名な酒を醸造している技術者を招待し醸造、出品を行い、大連市のワイン生産を補

う。

大連にもワイナリーを作ろうというプロジェクトが動き出した。この実施主体は、大連市を本拠とする海昌グループで、この会社は、水族館やテーマパーク、ゴルフ場などレジャー関連産業を行う大連地場の大手企業。オリックスが大連に中国総本部を作るにあたって、投資などの協定を結んだ会社でもある。

今回の業務パートナーは、フランスのラumont (LAMONT) という会社で、ボルドー地方でワイナリーなどを経営している会社とのこと。マルゴーやラトゥールといったワイン通なら誰もが知っているワイナリーとはちょっと違うようだ。中国では、輸入ワインは「フランス産」という意識が強く、フランスの会社と提携してワイン観光園を造ることは、中国人をひきつけるには十分だろう。

今、中国はワインブームと言っていいだろう。中国（香港も含む）の2010年フランス産ワイン輸入量は、3400万本で第2位。トップのドイツと50万本の差しかなかった。これは2008年に、香港で輸入税が廃止されたことがきっかけで、香港経由で中国に入り消費されている。最初は、上海や北京の富裕層に飲まれていたが、いまや地方都市にも拡大・浸透されている。ここ大連でも、かなり庶民的な中華の店でもワインを置くようになり、街角にはワインショップを見かけるようになった。

輸入ワインが珍重されていることは事実であるが、中国のワイン市場は「長城」「王朝」「張裕」という国内3大メーカーが70%近くをしめ、輸入ワインはまだ10%ほど。確かに、中国産のワインなら、スーパーで一本300円ぐらいからあり、700円か800円出せば、まあまあ飲めるワインが買える。

最近では、中国人の健康志向もあって、赤ワインを飲みながら中華を食べる人が激増している。中国ではワインのことを「紅酒」と言い、白ワインを飲むことはほとんどない。大連では、ビールの次に強い酒は、アルコール度数が40度～50度もある白酒（バイジュー）になってしまう。中国人でも、この酒は強すぎるため、ワインを飲むようになってきたのも理解できる気がする。

しかし、中国がワイン消費大国となることで、様々な問題も起こっている。ある輸入業者は、コスト削減のため、ワインを税金が安い大型容器に入れて輸入し、中国到着後、ビンに詰め直す。中身は、ワインの場合もあるが、ブドウをジャム状に濃縮しアルコールのほか、水、色素などを加え、口当たりを調整した偽ワインもあるらしい。ここまでのレベルの偽物は、一口飲めば、ワイン通でなくてもすぐに分かる。

また、中国お得意の偽ブランド商売がワインにも横行し、“Chateau Margot,”（本当はChateau.Margaux）“Chateau Latour,”（本当はChateau.Latour）といった、いかにもそれらしい偽の名称・ラベルを使った偽ボルドーワインが出回っている。中国の検査官もワインの知識がなく取り締まろうと思ってもなかなかうまくいかずに、高級ワインとして流通してしまうものが多くある。ボルドーワインにとって、EU以外では中国が第1の輸出国で大切な市場でもある、輸出しないわけにもいかず、ボルドーの関係者も頭を悩ませているとのこと。

偽ブランドのワインがでまわるということは、ある意味中国はワインブームであることを証明している。このタイミングで観光ワイナリーを大連に作ることは、的を得た投資だと言えるかのしれない。完成すれば、名所の一つとして、中国国内から多くの観光客が訪れるだろう。